M-81

紀麦品

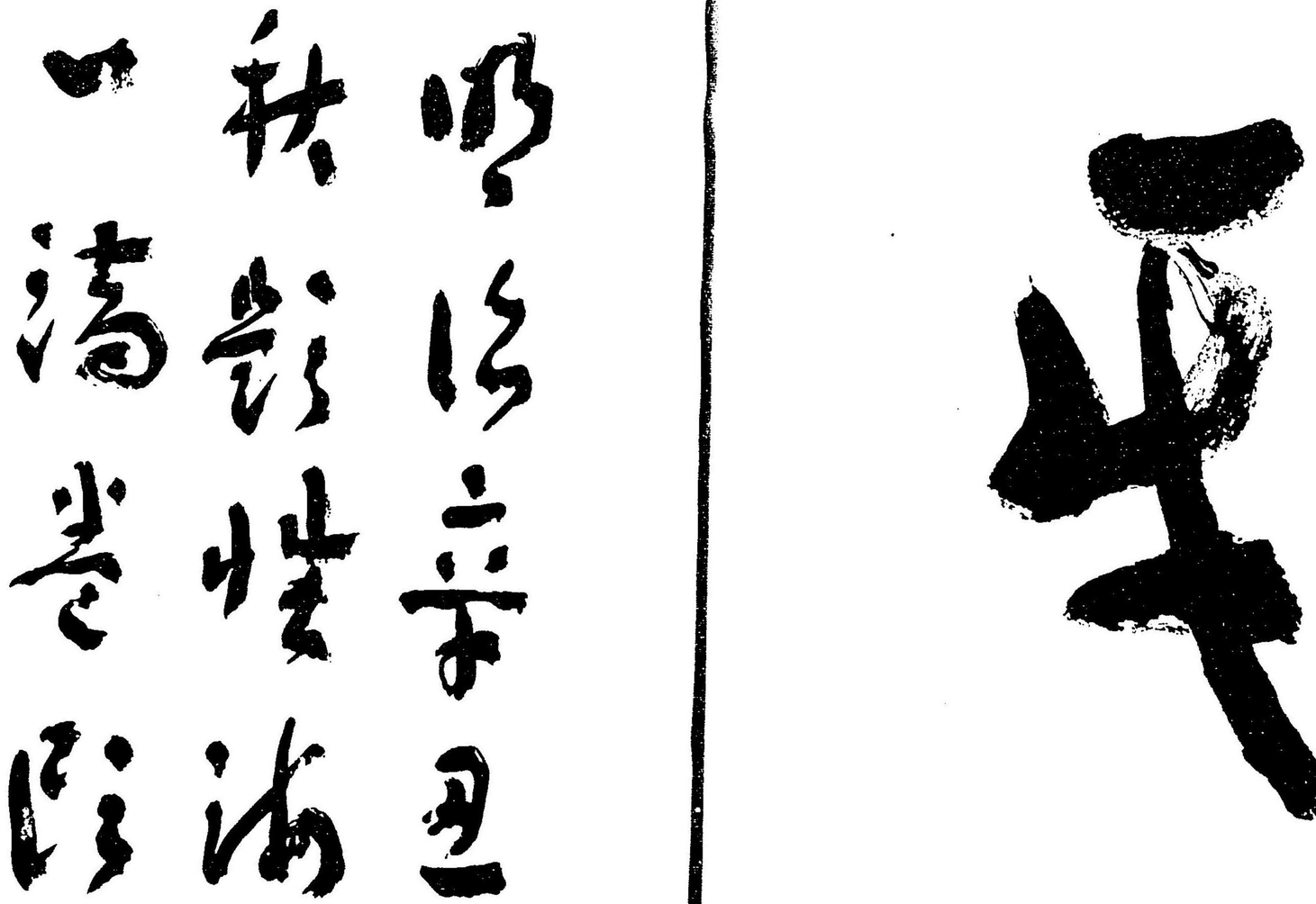
性海全

禅つの大意

特49
954

九州

九州


嘯傲亭記
秋影樓藏
清華堂

茶話

法水道人

某居士あり一日艸庵を敲て來り請て曰く吾門の歴史及綱要の如き其書古來傳ふるもの少からずと雖も未た簡潔にして其意を悉すものを見ず願はくは概畧を擧揚せられんことを同意者若干あり相計て聊か財を抛ち之を剞劂氏に授けて泛く有志者に頒たんと欲すと余曰く佛の道名相文字を出で一言にして盡すべきものなり禪と云ふ徒らに句に滯り言を尋ねは還て斷常に落ちん況や吾門に語句なく歴史なし豈に人に與ふるの一法あらんやと居士曰く歴史なく語句なしと云ふものは道に古今なければなり而も人に今古あり

人能く道を弘む道の人を弘むるに非す師豈に佛心を弘通するに意なからんやと余是に於て止むことを得すして梗概を錄して以て居士に與ふ只是れ轉句なり未た以て半提となすに足らす然も與麽なりと雖も自ら恐る家醜外かに向て擧くることを

明治三十四年仲秋於東台山後兩忘庵

宗活　釋　輟翁志

性海一滴目次

○佛教總論……一頁
○佛心宗歷史……五
○宗　意……二八
○入道要訣……三五

性海一滴

釋宗活著

佛教總論

嗚呼生死事大、無常迅速……國王の富貴尊榮も恃むに足らず……高尚なる學術も、將た天資の聰明叡智も何かせん……生死輪廻の鐵關門、惑業煩惱の桎械、枷鎖……如何にして之を透過せんか、如何にして之を脱得せんか……此、一大欲望を成就せんが爲には……富貴尊榮も浮雲の觀を生ぜん、爵祿學藝も弊蓰と同じく、亦顧みるに遑なからん……是れ實に、本師釋迦牟尼世尊が、身、命、財、の三者を賭して以て箇の重關、個の枷鎖を透脱せんと欲して、跡を雪山の窮谷に晦ませし初發心なり、一

時婆羅門教の隱士に就き教を學びしも其益なきを知り去て佛院迦耶に近き深林に入りて坐禪に數年を送れり、窮すれば變ず、變ずれば通ずるは、蓋し眞理の定則なり。雪山雲深き處、這箇勇猛なる志願は、幾多の二光と、山の如き艱難とを排除し去て、……果然、臘月八日曉天、粲然たる明星に和して、曠劫以來の無明は昨夢と化し、阿耨多羅三藐三菩提を成就せり、爾時覺えず口を衝きて、奇聲は一叫せられたり、……「奇哉一切衆生盡具有佛智惠德相」と、

佛教は世外教に非ず厭世主義に非ず實に主として、箇の眞理を證得して以て安神を得、智見を開發して以て活眼を開かしむるの目的たるや、復た疑を容れず、世人の悞解するが如く果して佛教は厭世的宗教ならば世尊は決して山を出でず空し

く雪山裡に老朽したるなるべし、世尊の證得せし上求菩提の大智は、下化衆生の大悲と相並んで、兩箇の法輪となり、區々途を異にせる一切衆生の根機を視て、遂に應病與藥の方便を以て、種々の法門を施設するの大醫王ではなり玉へり、是に於て人間天上の爲には、五戒十善を說き、聲聞の爲には、四諦の法を說き、緣覺の爲には、十二因緣を說き、菩薩の爲には、六波羅密を說き玉へり俱舍の唯物論の如き、法華の唯理論の如き、唯識に於ける唯心論の如き、四十九年の說法、頓あり、漸あり、半あり、滿あり、終に結集して、五千四拾餘卷の經典となり、三千年の今日に至る迄、傳來せし所以なり、而して其橫說縱說の敎理たるや、今世東西兩洋の科學と相對照して、些少の矛盾する所あるなし、大なる哉佛法、甚深にして極め難し、師は是れ十力調御、弟子

は是れ賢聖僧、所説の法門豈に是れ淺近ならんや、後世中に就き一分の萃を拔き將ち來て、各〻所依の經典となして一宗を開き、以て化を一方に擧ぐ、是れ各宗派の起れる所以なり、天台大師は、法華を以て正依の本經となして天台宗を開き、弘法大師は、大日經、及金剛頂經、蘇悉地經の三部を所依として眞言宗を立し、良忍聖應大師は、華嚴經及法華經を所依として融通念佛宗を立し、日蓮上人は妙法華經及無量義經、觀普賢經の三部を拔き、所依として日蓮宗を立し、或は無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部を所依として眞宗を開き、三經、一論、五部、九帖等を所依として淨土宗を立する等、現今吾國佛敎界の如きは、衆生隨類各得解の實を得るに於て、小少の遺憾なしと云ふべし、見渡せは柳櫻をこきませて都そ春の錦なりける、各〻自己の所信に就き、應分の安心を圖るべし

佛心宗歷史

印度

夫れ佛心宗の歷史は、即ち眞理の歷史なり、人間心性の歷史なり、過去の過去際に溯り、威音王以前に到達するも、直下言語同斷、心行所滅、唯是れ不生不滅にして、此の阿何をか獲得せん、既に心性眞理の歷史なし、爭でか佛心宗の起原あらんや、是を以て吾か宗は、釋尊の出世と否とを以て、直に佛心宗の立不立を論じ、一切藏經の有無を以て、吾宗の成不成を測定すべき所以のものに非す、然れども假に宗を立して以て、是れが濫觴を溫ねざるべからす、如何となれば道に古今なしと雖も、人に今古

あり、人能く道を修し、修し得て人を忘了す、然るときは人即ち是れ道、別に人あるに非す、多義多角多名なるは眞理の現象にして、道の本體に非ず、是故に道若し古と等きときは、人も亦た古と等し、是れ吾宗三千年來佛々手を授け、祖々相傳へて法統連綿、敢て斷えざる所以なり、

始め大覺世尊、生下し來て、周行七歩、一手は天を指し一手は地を指し、大獅子吼して曰く「天上天下唯我獨尊」と、是は之吾が宗起原の消息なり、啻にこれ而已にあらず、出家苦行、再び雪山に入て、端坐六年、一夜明星に和して豁然大悟せしより、說法四十九年、人々無漏の眞性を悟り、箇々不退の法忍に住す、然も恁麼なりと雖も、奈何せん別に向上の些子あることを、看よ、末後世尊、靈山會上に金華を拈じて衆に示す、百萬の人天措となし、獨り迦葉尊者のみありて破顏微笑す、佛曰く、吾に正法眼藏涅槃妙心、實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附屬す、汝常に善く護持すべしと、是れ吾が宗、別に生涯ある所以にして、教外別傳復た苟も來らず、後來阿難、迦葉尊者に問て曰く、世尊金襴衣を傳ふる外、別に箇の何の法をか傳ふ、迦葉阿難と召す、阿難時に應諾す、迦葉曰く、門前の刹竿を倒却若せよと、阿難言下に大悟、是れより次第に傳ふ、商那和脩、優婆毱多、提多迦、彌遮迦、婆須密、佛馱難提、伏馱密多、脅尊者、富那夜奢、馬鳴尊者、迦毘摩羅、龍樹大士、迦那提婆、羅睺羅多、僧伽難提、迦耶舍多、鳩摩羅多、闍夜多、婆修盤頭、摩拏羅、鶴勒那尊者を經て、廿四傳して獅子尊者に至る、尊者難に因て罽賓國王の爲に戮せらるゝと雖も、脅て正法眼を以て、婆舍斯多に附す、正宗記に婆舍斯多尊者を傳して曰く、

南印度の德勝王、靈通呪師の讒を信ず、時に太子不如密多、之を諫む、王怒て曰く、太子斯多に黨すと、遂に之を囚ふ、一日果して尊者を召し、正殿に御して之に問て曰く、我國は邪法を容れず、師の學ぶ所乃ち是れ何の宗ぞ、對て曰く、我か學ぶ所は佛法の正宗なり、王曰く、佛滅已に千歲を過ぐ、而るに汝安ぞ之を得たると、尊者曰く、釋迦如來より傳法、更に廿四世にして我師獅子に至る、我れ適〻得る所は、獅子比丘に承るなり、王の曰く、獅子戮死せらる、安ぞ法を以て傳ふることを得ん、果して然らば何を以てか信となす、尊者曰く、我師傳法僧伽梨を授けて焉に在りと、即ち王に進む、王初より然らずとす、遂に命じて之を燒かしむ、火方に熾にして、遽に異光あり、其火より發して世火を掩ふ、祥雲あり之を覆ふ、天香馥郁たり、燼するに及んで、僧伽梨故

の如し、王大に信して禮を尊者に盡す、次に不如密多を經て般若多羅尊者に至る、尊者一日南天竺國に至る、其國王香至なるもの、詔して宮中に禮し、寶珠を以て之を施す、初め王三子あり、而して其志各〻修する所あり、其長を月淨多羅と云ふ、好て念佛三昧を修す、其次を功德多羅と曰ふ、好て福業を修す、其次を菩提多羅と曰ふ、好て佛理に通し、出世を以て務となす、是に至て香至皆命じ出して、尊者を禮せしむ、尊者三子の皆な善を好むを以て、其智の遠近を驗せんと欲して、卽王の施す所の珠を以て各〻之を辨ぜしむ、曰く「世に復た此の珠に加ふる者ありや」と、月淨多羅曰く「此の寶珠最上なり、世に之に勝れる者あることなし、吾か王家に非んば孰か能く之を致さん」、其二功德多羅、亦た其說の如し、其三菩提多羅曰く「此珠世寶なり、未だ上と

するに足らず、夫れ諸寶の中法寶を上となす、此れは是れ世光なり、諸光の中智光を上となす、此れは是れ世明なり、諸明の中心明を上となす、然も此珠光明自ら照すこと能はず、要す智光を假て此を明辨す、既に之を明辨して卽ち是の珠を知る、既に是の珠を知て、卽ち其寶を明らむ、若し其寶を明らめば、寶自ら寶ならず、若し眞の珠を辨ぜば、珠自ら珠ならず、珠自ら珠ならざる者は、要す智珠を假て世珠を辨ず、寶自ら寶ならざる者は要す智寶を假て法寶を明す、然らば則ち我が師は道なり、其寶卽ち現ず、衆生道あり、心寶も亦た然り」、尊者其才辨を喜で、復た問て曰く「諸物の中何物か無相」曰く「諸物の中に於て不起無相」、又問て曰く「諸物の中何物か最も高き」曰く「諸物の中に於て、人我最も高し」、又問て曰く「諸物の中何物か最も大なる」曰く「諸物

の中に於て法性最も大なり」、尊者默して喜て是れ大法の器なり、必す己れの嗣となさんと謂ふ、後弟子となり、尊者に侍して大法を研鑽すること二十年、遂に其法印衣鉢を受く、尊者曰く「汝ち諸法に於て已に通量を得たり、今宜く菩提達磨を以て、汝か名となすべし」と、尊者また讖して曰く「汝ち我か滅後六十七歲を經て、應に支那に赴き、大器を接すべし」と、既にして時至り、山河を跋渉すること三年、特々として彼の土に入る實に梁帝普通元年なり、

支那

抑々達磨大師の支那に入るや、初より放光動地の作なく、亦た雨法如雲の益なしと雖も、然も直指人心見性成佛の提唱は、如

何に依文解義底の、梁朝多數の佛徒教家をして、其肺腑を攪亂せしめたるや、佛心宗の端的は、唯に當時四百餘州を震懾したる耳ならず、一度び空拳を奮て、其實效を求むるに及ては斷臂の二祖となり、三祖より六祖に至て、遂に江西湖南の二甘露門となり、百丈となり、黃檗となり、更に臨濟の金剛王寶劍となり、其照用の行ずる所、三聖の喝驢邊に滅却し去て、後來兒孫轉た天下に滿つ、實に達磨は佛心正宗東渡の鼻祖にして、而も三國絕代の大宗師なり、梁の武帝初め教に依て修行し、自ら袈裟を披して、放光般若經を講す、天下に誥詔して、寺を起し僧を度せしむ、人之を佛心天子と云ふ、達磨の武帝に見ゆるや、帝問ふて曰く、「朕寺を起し僧を度す、何の功德かある」と、磨云く「無功德」、帝復た問ふて曰く「如何なるか是れ聖諦第一義」と、磨云「廓然無聖、帝曰く「朕に對する者は誰そ」、磨曰く「不識」、帝契はず、後、志公に問ふ、志公曰く「陛下還て此人を識るや」、帝云く「不識」、志公曰く「此は是れ觀音大士、佛心印を傳へんが爲に得々として來れるなり」帝悔て遂に使を遣はし、去て請ぜんと欲す、志公曰く「道ふこと勿れ、陛下使を發し去て取らしめんと、國の人去るとも佗亦た回らず」と、大師拂袖し去て魏に至り、嵩山少林寺に入て、壁に面して禪坐する耳、以て箇の標榜を示す、當時滿天下、只管儀式的佛教に惑溺して、文字教相にのみ是れ執す、烏獲の力孟賁の勇ある底の達磨の活眼睛は玆に端なく此の死佛教者か頂門の一隻眼とはなりたるなり、

神光なる者あり、孔老の學に精通し、後教乘を學習して、自ら一家を成す、然も一片の疑團胸中に懊惱して、心地未だ穩ならず、

一日心要を求めんが爲に、特に嵩山に上る、實に大通二年臘月九日なり、少林寺に入て入室を乞はんと欲するも、唯是れ胡僧の默々として壁を觀るなるのみ、法を求むるの情切なりと雖も、奈何せん横點頭だもせざることを、時に薄暮、流水凍て筧に聲なく、黄雲天に凝て、雪漸く來り、寒氣骨に酸る、三更に及んで萬山一色、恰か魄を氷壺の中に濯ふに似たり、積雪既に腰を埋めて、咳唾血涙も亦將に氷らんとす、天明に垂んとする頃ほひ、大師始めて兩片皮を皷して曰く、「汝久しく雪中に立つ、何の求むる處かある」、神光曰く、「唯願はくは和尚大慈大悲、甘露の法門を開きて、廣く群生を度し玉へ」、大師曰く、「諸佛無上の妙道は、曠劫に精勤し、行じ難きを能く行じ、忍び難きを能く忍び、而して後ち之を證す、豈に小德小智輕心慢心を以て眞乘を冀ふべき

ものならんや」と、又た他を云はず、神光是に於て求道の志愈〻急切なり、遂に携ふる處の利刀を以て、自ら左臂を斷じて、以て聊か法の爲めに身命を惜まざるの信を表す、大師彼れの法器なる事を知て、即ち入室を許可せり、神光曰く、「我心未だ安からず、願はくは我が爲めに安心せしめ玉へ」、大師曰く、「心を持ち來れ、汝が爲に安ぜん」、光曰く、「心を求むるに不可得なり」、大師曰く「汝が爲に安心し畢ぬと」是に於て神光、誠を投じて大師に隨侍す、後來大師其徒に謂て曰く、「汝等宜く各〻其所詣を言ふべし」と、道副曰く、「我が所見の如くんば、文字を執せず、文字を離せず、而して道用を作す」、大師曰く、「汝は吾か皮を得たり」、尼總持曰く「我が今ま解する所の如きは慶喜の阿閦佛國を見るが如く、一見して更に再見せず」、祖曰く、「汝は吾か肉を得たり」、道育曰く、「四

大本空、五蘊非有、而して吾が所見は、一法の得べきなし、大師曰く「汝は吾が骨を得たり、神光終に前に趨て拜し已て位に依て立つ、太師曰く「汝は吾が髓を得たり」即ち二祖神光可大師、法を嗣ぎ、三祖を僧璨と云ひ、四祖道信、五祖弘忍に至り、南北頓漸を分つ、五祖一日衆に告て曰く、正法は解し難し、徒らに吾が言を記持して何かせん、各自一偈を述べて處悟を通ぜよ、若し能く冥符するあらば、佛祖の衣法みな其人に付授せん、時に神秀上座、一偈を南廊の壁間に書して曰く「身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃」と、五祖之を見て曰く「後代之に依て修行せば、亦た勝果を得ん」と、之を北漸と稱す、時に惠能大師は碓房に在り、人の其偈を誦するを聞て曰く「是なることは即ち是なり、了ずることは則ち未だ了ぜず」と、夜に至て一偈を神秀が偈

の側に書す「菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃」と、五祖此夜陰かに衣法を惠能に傳へて遠く去らしむ、是を南頓となす、而して南頓を以て正宗となし、北漸を以て旁出となす、北宗は其法疾くに絶し、南宗は其法綿々相續して、吾が國今日に至る迄、兒孫繁榮せり、六祖惠能大師に、嗣法の神足二人あり、一を青原行思と云ひ、一を南嶽懷讓と云ふ、懷讓禪師の法は、馬祖、百丈、黃檗、を經て、臨濟禪師に至り、行思禪師の法は、石頭、藥山、雲巖、の諸公を經て、洞山に至り、洞山より、雲居、同安(不同)、同安(志概)、梁山、太陽、投子、芙蓉、丹霞、長蘆、天宗、玨童、雪竇、天童禪師を經て、日本曹洞宗の高祖、道元禪師となり、臨濟下は、興化、南院、風穴、首山、汾陽、慈明、黃龍、晦堂、靈源、長靈、無示、心門、雪庵、虛庵、を經るものを、日本臨濟宗の初祖、榮西禪師となし、慈明禪師より更に、楊

岐、白雲、五祖、法演、天寧、虎丘、應庵、密庵、松源、運庵、虛堂、の諸公を經るものを、日本佛心正宗の初祖、南浦紹明禪師、卽ち大應國師となす、

日本

祖師禪の吾國に入るや、遠く奈良朝に始まれり、元興寺の道昭は、孝德天皇の白雉四年に入唐して、法相宗を玄奘三藏より受るの旁ら、惠滿禪師に就きて、禪法を稟けて歸朝し、唐の福先寺の道璿法師は、吾か天平八年に來朝せられ、當時大安寺の行表は、璿師より禪旨を傳へられ、傳敎大師は、延曆廿二年入唐して台密を學ぶの旁ら、翛然禪師に參じて禪を承け、其弟子慈覺大師も、大同五年に入唐して、蕭慶居士に就き、禪法を授かり、又唐

僧義空は、嵯峨天皇の妃、檀林皇后の招に應して、來朝して禪法を傳ふ、其他叡山の覺阿、攝州三寶寺の能忍律師等、各〻禪に於て所得ありたりと雖も、或は諸宗兼學、或は北宗の旁出等なるを以て、其法幾何もなく斷絕して弘く後世に傳はらす、榮西禪師に至て、完然なる禪宗の一派をなし、始て臨濟宗の開祖と稱せらるゝに至れり、而も春晩黃花簇々地に鋪くと雖も、終に花落ちて實を結ばざるか如く、大半其傳を失す、獨り南浦紹明禪師に至て、一華五葉の種草、東海に生じ來て、始めて箇の毒果を結ぶ、稽首す東海第一の祖、兒孫綿々今日に至て絕えざることを、「敲磕門庭細揣摩、路頭盡處再經過、明々說與虛堂叟、東海兒孫日轉多」と、是はこれ虛堂和尙か南浦紹明知客を送るの偈なり、師初め講肆に遊ぶ、年弱冠に垂んとして、棄て鎌倉建長に往

き、蘭溪隆禪師に參ず、後辭して支那に入り、徧ねく諸宿に參じ、後虛堂愚和尙に謁す、命じて賓客を典らしむ、送迎を除くの外、參扣を弛べず、咸淳改元の秋、堂、徑山に遷る、師を率て俱に行く、一夜定より起て、豁然大悟、偈を作て曰く「忽然心境共忘時、大地山河透脫機、法王法身全體現、時人相對不相知」と趨り行て堂に呈す、堂大に悅んで衆に報じて曰く「明知客、參禪大徹し了れり」と、三年秋拜辭して東歸す、本朝文永四年なり、七年冬、筑州の興德に出世す、後太宰府の崇福に遷り、居ること三十年、關西風靡す、師一日、近里の一叢林に過る、佛殿の柱を視るに題して曰く「心隨萬境轉轉處實能幽」と時に一僧に逢ふ、便ち問ふ、堂頭和尙如何か指示す、僧曰く、和尙但々幽の一字を推究せしむ、師曰く「恁麼那」、其僧便ち去る、師顧みて侍者に謂て曰く、此叢林人を出し得ず、何ぞなれは、日本人多く心を幽處に留む、是を以て常に所得をして遲からしむ、侍曰く「師の意如何」曰く「若し是れ山僧ならは、乃ち作麼生か是れ轉處、と拶著し去らん、侍曰く「爾ら は則ち何ぞ彼に向て道はざる」師曰く「禪門は問はずして答ふるの例なし」と、德治二年、副元帥平貞時、聘して正觀寺に居らしめ法を問ふ、更に請して建長を董さしむ、入寺小參に曰く「今年臘月二十九日來無所來、明年二十九日去無所去」大衆驚訝して其意を諭すことなし、翌延慶元年臘月二十九日俄に微疾を示す、二更に至て偈を書して曰く「訶風罵雨、佛祖不知、一機轉閃電猶遲」と、筆を收めて跏趺して入滅す、法を嗣ぐ者を大燈國師となす、大應國師一日大燈に謂て曰く「爾既に明投暗合、吾が宗汝に到て大に世に興らん、只是れ二十年長養して、然して後

吾か證明を知らしめよ」師時に年二十六なり、翌歳維東に卜居す、衲侶六七輩、刻苦自彊ること二十年に垂んとす、嘉暦丙寅、城北紫野に移て庵居す、花園上皇、師の道風を聆て詔有て宮に入る、上皇僧伽黎を着て對坐して曰く「佛法不思議王者と對坐す」、師曰く「王法不思議佛子と對坐す」上皇龍顔を動し、玄談時を移す、師遷化に臨で、端坐して滅を取んと欲す、久しく足疾を患るに因て趺坐すること能はず、首座之を訝る、師兩手を以て足を盤て、而して左膝爲めに傷折して、血流れて衣を染む、偈を書して曰く「截斷佛祖吹毛常磨機輪轉處虛空咬牙」大燈の法を嗣ぐ者を、妙心開山關山國師となす、當時禪風大に起り、北陸には洞水の漲ぎるあり、京洛には濟風扇ぎ、京都五山は西に建ち、鎌倉五山東に興り、王公將相は靡然として、佛心の宗風に浴するに至れり、見性成佛の佛心宗は、此の尙武時代の士氣に投合し、皷舞し、顯れては鎌倉武士の勇敢不屈なる心膽となりて、能く關八州に敵し、隱れては五山文學となりて、不立文字の禪門は却て文華の淵叢となりたり、是を以て鎌倉室町氏時代の如きは、諸國大小名、皆な干戈劒鎗の間に在て、能く佛心宗を信奉し、之に依て安神を得、之に依て心膽を練り、之に依て力用を專らにしたるに非すや、花園皇帝、後醍醐皇帝、光嚴皇帝、平時賴、時宗、楠正成、藤原宣房、藤房、細川勝元の如き其尤なるものなり、

關山國師、一日雲門の關字を看て、豁然大悟、急に丈室に趨り行て、處悟を呈す、國師手を拊て曰く「儞は再來の人なり、今關字に因て悟徹す、宜く關山と號すべしと、偈を付して之を證す、」後醍醐帝、國師に詔して入內せしむ、國師偶〻不安、師に命じて代て

詔に赴かしむ、帝問ふ「萬法と侶たらざるもの是れ什麼人ぞ」、帝、手中の圭を以て畫一畫して曰く「者個蠻」師珍重して退く、帝大に悅ふ、幾何もなくして師辭して濃の伊深山に入り、艸庵を盤結して居る、花園上皇、近臣藤原藤房を遣はして、宣して曰く「和尙百年後、諸弟子の中、誰に隨て法を問はん、願はくは指敎を承ん」と、國師奏して曰く「關山吾が道髓を得たり、天生風顚、居るに定止なし、他日詔して之に徵問し玉へ」と、是に於て帝花園離宮を以て、改めて梵刹となして、關山をして住持せしめて第一祖となす、師出世規典に拘はらず、直に向上の一著を拈ず、大機大用の者に非ざれは、手脚を措置し難し、趙州柏樹子の話を拈じて學人に示して曰く「柏樹子話有賊、機汝等作麼生會」と、其意に契ふものなし、師氣宇峭峻、世緣恢濶、學人の入室する每に罵詈呵咄連棒して趕ひ出す、故を以て其法を嗣ぐ者は、授翁宗弼一人のみ、宗弼禪師は、亞相藤原宣房の子、俗名藤房、御醍醐帝に仕へて黃門侍郞に至る、嘗て宗門向上の事あるを聞て、公より退くの暇、初め明極、俊に參ず、後大燈國師に參じて粗〻所省あり、建武元年、竊かに簪纓を脫して、城北の嵩倉に屆て、不二を拜して髮を剃り、戒を納る、時に年三十八、師初め關山大燈の道髓を得ると聞て、心に記して忘れず、曆應の初め、關山詔に應して妙心を創開するに及んで、到て掛塔す、刻苦辨道遂に其髓を得たり、國師入滅に及で、師將に逝れ去らんとす、一衆嗣法人なきを以て、堅く請じて住持せしむ、是に於て規矩に拘らず人を接するを任となす、其法を嗣ぐ者を無因禪師となす、次に日峰宗舜、義天玄承、雪江宗深、東陽英朝、大雅崇匡、功甫玄勳、先照瑞初、以安

智察、東漸宗震、庸山景庸、愚堂東寔、至道無難、道鏡惠端、の諸公を經て遂に吾宗中興の祖白隱慧鶴禪師に至る、現今吾國臨濟宗の諸老宿の化を各所に擧ぐるもの悉く白隱下の兒孫に非ざるはなし、五百年間出の言洵に虛からざるなり、師嘗て謂く、大慧云ふ、我は參禪の勢至なりと、鶴林は則ち道はん、我は參禪の俠者なりと、法幢の盛なる亦偶然に非ざるなり、

佛心正宗傳法相承係

印度

釋迦牟尼佛——摩訶迦葉尊者——阿難尊者——商那和修尊者
優婆毱多尊者——提多迦尊者——彌遮迦尊者——婆須密多尊者
佛馱難提尊者——伏馱密多尊者——脇尊者——富那夜奢尊者
馬鳴尊者——迦毘摩羅尊者——龍樹尊者——迦那提婆尊者
羅睺羅尊者——僧伽難提尊者——伽耶舍多尊者——鳩摩羅多尊者
闍夜多尊者——婆修盤頭尊者——摩拏羅尊者——鶴勒那尊者

師子尊者——婆舍斯多尊者——不如密多尊者——般若多羅尊者

支那

初祖達磨大師
二祖慧可大師
三祖僧璨大師
四祖道信大師
五祖弘忍大師
六祖惠能大師
南嶽懷讓師
馬祖道一
百丈懷海
黃檗希運
臨濟義玄
興化存獎
南院慧顒
風穴延沼
首山省念
汾陽善昭
慈明楚圓
楊岐方會
白雲守端
五祖法演
天虎克勤
應庵曇華
虛庵懷敞
密庵咸傑
松源崇嶽
運庵普巖
虛堂智愚
南浦紹明
宗峰妙超
關山慧玄
授翁宗弼

黃龍晦堂
靈源惟清
長靈守卓
無示介諶
心聞貴賜
雪庵從瑾
虛庵懷敞
栄西：（日本臨濟宗開祖）

青原行思
石頭希遷
藥山惟儼
雲巖曇晟
洞山良价
雲居道膺
同安丈禪
同安（觀志）
梁山緣觀
太陽警玄
投子大同
芙蓉道楷
丹霞子淳
長蘆宗賾

天宗玨童
雪竇重顯
天童（如淨）
道元：（日本曹洞宗開祖）

無回宗因
日峯宗舜
義天玄承
雪江宗深
東陽英朝
大雅當仁
功甫玄勳
先照瑞初
以安智察
東漸宗震
庸山景庸
愚堂東寔
至道無難
道鏡慧端
白隱慧鶴

日本

不立文字教外別傳は佛心宗の宗旨にして、直指人心見性成佛を以て安神の標準となす、是故に、佛語心を以て宗とし無門を以て法門とす、把住して謂ふときんば、吾宗に語句なく、更に一法の人に與ふるなし、五千四拾餘卷の經典も何の用を爲すにか堪へん、放行するときんば、四十九年の說法、頓漸半滿、乃至諸子百家の言論より、治生産業、及麁言細語、悉く吾宗の活句ならざるはなし、餘宗は一分の經文を以て所依とし、淺より深に從ひ學び而して後に門に入る、吾宗は內思惟分別の情に涉らず、外學問計度の功を用ゐず、修する者をして、直下に本心を徹見せしむ、然も與麼なりと雖も、奈何せん禪に小乘禪あり、大乘禪

あり、如來禪あり、祖師禪あることを、昔し靑州の人香嚴智閑禪師、法を溈山祐禪師に嗣ぐ、仰山後ち師を見て曰く、「和尙師弟（仰山嗣法溈山故ニ香嚴ハ仰山ノ法弟）大事を發明する事を讃歎す、爾試に說けよ看ん、」師一頌を擧す、仰山曰く、「此は是れ宿習記持して成ず、若し正悟あらは別に更に說き看よ」師又頌を成す曰く、去年貧未だ是貧、今年貧始是貧、去年貧猶有卓錐地、今年貧錐也無」と、仰山曰く、「如來禪は師弟の會するを許す、祖師禪は未た夢にだも見ざることあり、」師復た頌あり、曰く、我有一機瞬目視、伊若人不會別喚、沙彌、「仰山乃ち溈山に報して曰く、「且喜すらくは、閑師弟、祖師禪を會することを」と、

抑々吾か佛心宗は一佛大覺圓滿の心を傳ふるなり、是れ即ち達磨直指の祖師禪なり、或は呼て佛心究竟禪と稱するも可な

り、達磨大師の一たび實效を求むるに於ては、烏獲の力、孟賁の勇あり、百の摩騰、竺法蘭と雖も、爾く較べさるものは、佛心究竟の功驗なり、曹溪の明上座を接する、馬祖の龐居士、及百丈を接する、黄檗の臨濟を接する、臨濟の定上座を接する、睦州の雲門を接する、德山の雪峰を接する、白雪の五祖を接する、慈明の黄龍を接する等は、佛心究竟の作用なり五家七宗の如き、各〻家風の殊特なるものは、是れ佛心究竟の光明なり、臨濟は全機用ひず、棒喝交も馳す、劍刃上に人を求め、電光中に手を垂る、雲門は北斗に身を藏す、金風體露、三句辨取し、一鏃空に遼る、曹洞は君臣合道、偏正相資く、鳥道玄路、金針玉線、潙仰は師資唱和し、父子一家にして、明暗交〻馳せ、語點露さす、法眼は聞聲悟道、見色明心、句裏に鋒を藏し、言中に響あり、僧あり五祖法演禪師に問ふて曰く「如何なるか是れ臨濟下の事」演曰く「五逆雷を聞く」如何なるか雲門宗、曰く「紅旗閃爍」如何なるか是れ曹洞宗、曰く「苦を馳せて家に到らす」如何なるか是れ潙仰宗、曰く「斷碑古路に横はる」如何なるか是れ法眼宗、曰く「巡人犯夜」と、這箇の答話、甚た明對に非ずや、唐の終南山に圭峰宗密なるものあり、六祖下荷澤神會の孫、遂州道圓禪師に就て、佛心宗を究め尋ね、華嚴宗第四祖、清涼澄觀の、華嚴一乘教に達するを欽慕し、弟子の禮を執り、遂に第七祖となる、其著、禪源諸詮に曰く「乃至、禪定の一行を最も神妙となす、能く性上無漏の智惠を發起す、一切の妙用萬行萬德、乃至神通光明、皆な定より發す、故に三乘の人、聖道を求めんと欲せば、必ず須らく禪を修すべし、これを離れて門なし、此れを離れて路なし、乃至又眞性は即ち不垢不淨にして、凡

聖差なしと雖も、淺なり、深なり、階級等を殊にす、異計を帶て欣上厭下して而して修する者は是れ小乘禪なり、我法二空の顯るゝ所の眞理を悟て、而して修する者は是れ大乘禪なり、若し頓に、自心本來清淨にして元と煩惱なく、無漏の智性本と自ら具足す、此れ心即佛、畢竟異なしと悟て、此に依て而して修する者は、是れ最上乘の禪にして、亦た如來清淨禪と名け、亦た一行三昧と名け、亦た眞如三昧と名く、此は是れ一切三昧の根本なり、而も達磨門下、展轉相傳するもの是れ此禪なり」と、是れ佛心究竟禪とは云ふなり、豈に夫れ空しく默を守るの癡禪或は文を尋ぬるの狂慧と、同一の論ならんや、

盤山曰く、「向上一路千聖不傳」と、雲門曰く「山河大地絲毫の過患なきも猶ほ是れ轉句なり、直に一色を見ざるを得るも、始めて

是れ半提なり、更に須らく向上全提の時節あることを知るべし」と、浮山曰く「末後の一句始めて牢關に到る」と、吾が鶴林和尚曰く「隻手無聲の微妙音を聞得て十成なれは、須らく其根元を見徹すへし」と是れは之れ佛心究竟直指の一著子を示す底の消息なり、昔し圓悟禪師因に張無盡居士を見て、華嚴の旨要を劇談す、悟曰く「華嚴現量の境界、理事全く眞なり、初めより假法なし、所以に一に即して而して萬、萬に即して一となす、一復た一、萬、復た萬、浩然無窮、心佛、衆生、三無差別、卷舒自在、無礙圓融なり、此れ極則なりと雖も、終に是れ風なきに市々たるの波あり」居士是に於て覺えず榻を促む、圓悟遂に問ふて曰く「此に到て祖師西來意と同こせんか別とせんか」と、居士曰く「同なり」悟曰く「且得沒交涉」、居士が色之れが爲めに慍る悟曰く「見ずや雲門

曰く、山河大地、絲毫の過患なきも、猶ほ是れ轉句なり、直に一色を見ざるを得るも、始めてこれ半提なり、更に須らく知るべし、向上全提の時節あることを、彼の德山、臨濟、豈に全提に非すや」と、士首肯す、翌日復た事法界、理法界より、理事無碍法界に至るまでを、圓悟また問ふ「此に禪を說くへきか、」居士曰く「正に好し禪を說くも、」悟笑て曰く、然らす、正に是れ法界量裡に在り、蓋し法界未た滅せず、若し事々無礙法界に到ては、法界量滅して、始めて好し禪を說くに、如何なるか是れ佛、乾屎橛、如何なるか是れ佛、麻三斤、是故に眞淨の偈に曰く、事々無礙如意自在、手把豬頭口誦淨戒、趁出婬房未還酒債、十字街頭解開布袋、と、居士曰く「美哉の論、豈に聞くを得易からんや」と、是れはこれ佛心究竟禪を了達するの智力なり、豈に容易の看をなすへけんや、珍重、

左に掲ぐる入道要訣一編は、白隱下の駿足、東嶺古佛の述ふる所なり、大心の菩薩あり、出來て吾門に入らんと欲するものは、須らく先つ、信、誓、の二を以て地盤となし、然して後ち、此の五ッの要路に依て修せば、必す無盡の法藏は自然に手に入らん、

入道要訣

夫れ凡夫地より直に佛地に登ると云に、五の料簡あり、一には同性の義、二には異塗の義、三には憤勵の義、四には進修の義、五には歸本義なり、

第一、同性の義と云は、

人々具足する本性と、三世諸佛の本性と無二なり、功德莊嚴も均しく光明赫奕たり、智惠神通悉く同じ、譬へは大日輪の光明

の、山河大地を照さゞる處なきが如し、賤き糞土の上も、貴き金玉の中も、替ることなく明かなり、然るに盲人は其光の中に在ながら見ず知らず悲しべし、

第二、異塗の義と云は、

本性は諸佛衆生と同體不二なれども、其の意の指す處各〻別なり、佛は内に向て本心を照し玉ふ衆生は外に向て萬境に亙る、故に愛する物に貪欲を起し、惡む者に瞋恚を起し、思ひ凝て愚癡となる、此の三毒の性に迷ひ味されて本心をも失へり、貪欲深き者は餓鬼となり、瞋恚深き者は修羅となり、愚癡深き者は畜生となり、三毒齊き者は地獄に墮て種種の苦みを受く、是を四要趣と云、恐るべきの至なり、貪瞋癡なれども自ら誡めて恣にせざる者は人間なり、生々此の身を失はず、貪瞋癡漸しづ

まりて、誡めざれども恣ならざるものは天上に生る、是を六欲天と云ふ、三毒の性滅して定慧の德あれども、定愛の見ありて瞋癡の餘習あり、是れ色天十八種の中に生る、定愛已に盡れども未だ佛の知見を開かざる、是を無色界の四天と云ふ、聲聞緣覺の行者此天に在り、前の四惡趣に人天を加ふれば六道となる、聲聖緣覺と菩薩と佛とを加ふれば即十界となる、凡そ六道の中は設ひ人天の樂を受るも皆苦の本なり、如何となれば、貪瞋痴煩惱の深き心は以て、此の世界を成じ、此身を感じ出せり、然らば此業煩惱を滅せざれば、解脫せず、此六趣の苦界を解脫せざれば、眞の安樂にあらず、此の苦界を解脫せんとならば先づ無常を觀ずべし、生あるものは必ず死す、若きも賴しげなし、强きも危し、富貴なるも衰ふ、尊特なるも保ち難し長壽も八十

年に過ぎす、然は此の世無常にして樂むべきことなし、貧ければ無きに苦み、富ものは有に苦み、高きは高きに苦み、賤きは賤きに苦み、衣食に苦み、妻子に苦み、財寶に苦み、位官に苦む、兎に角に煩惱の性を亡して、解脫の道に到らされは、國王、大臣、諸天、神仙の位に升るとも、電光朝露の如し、只暫くの間なるのみ、緣合すれは了々としてあれども、緣散ずれは空し、父母の緣を假て、此身を得たり、地の緣を以て、皮肉筋骨となる、水の緣を以て唾涕膿血となり、火の緣を以て暖和柔順なり、風の緣を以て、氣息動轉す、此四緣忽ち盡れば、身冷て息絶て我と云ふものなし、然るときは、此身は實の我にあらず、只假の宿のみ、如何に此假の宿に貪著して、永却の事を顧みざる、此無常、苦、空、無我、の四波羅密を觀して、菩提の道を求るを、聲聞四諦の法と云ふ、是れ諸

佛入道最初の要門なり、又緣覺の十二因緣と云は、夫れ本心暗きが故に、種々の業を作る、是れ無明と行との二つなり業積りて習性となる、其父母に緣して胎内に宿る、是識と名色となり、體形備て六根漸く成るを六處と云、出生れ未だ好惡を少も辨へざるを觸と云、三歲の後は早や花や味を悅び、美しき色を愛する是を受と云、十歲以後財色を求る心あるを愛と云、十五六歲を過ては、頻に貪著するを取と云、廿歲より盛に業を作りて罪を恐れざるを有と云、此業を作り罪を重ぬる中に、未來の生處は善惡ともに定るを生と云、一生此の如きの業のみ作りて、老衰へて死する、是を人間、十二因緣と云、緣覺は是事を觀じて、煩惱を盡して菩提に入る、皆是れ諸佛入道の方便なり、無明の暗き心を悟りて、其實證を見得すれば、無明即ち佛性となり、行即

ち道となり、識即ち智德となる、然るときは十二因緣皆正法に隨順して遂に解脫の大果に到る、又菩薩の六波羅密と云は、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、なり前の聲聞緣覺二門の修行は、只自己一人の益にして、利他の法なし、菩薩は自利道行の中、又化他の行を兼ねたり、法の爲めに財を惜まず、上は師長に供養し下貧賤に施與するは、是れ財施なり、己れが智德の分量に隨て人の爲に說法教化するは、是れ法施なり、この二施を以て普ねく衆生に施す、是を布施波羅密とす、內に道心を護持し、十重四十八輕の戒行を修するを、戒波羅密とす、觀理を忍受し、毀譽の境界に轉ぜられず、一念の瞋恨生ぜざる、是を忍辱波羅密とす、自利利他の大行に於て日々に增長し、怠慢を誡め、勵み進るを精進波羅密とす、坐禪工夫を專一に心挂け一切の妄想を離るを、禪定波羅密とす、敎理を究め、佛意を察して、諸の迷情を覺破するを、智惠波羅密とす、是を菩薩の六波羅密と云、此の聲聞、緣覺、菩薩、の修行を三藏とも云ひ、又三乘とも云ふ、諸佛成道の方便にして、萬古不易の法なり、一佛乘の學者、是を小乘三藏の法なりとて痛く退くるは、小乘の偏見を碎て、大乘の妙理を開悟せしめんが爲なり、大乘の妙理を信解すれば、三乘の行門皆大乘門の輔翼なり、誓へば臣民奴婢は君主よりは劣れりと雖も、若是を捨る時は君主の威德を失ふが如し、臣民多きが故に君主尊し、小乘滿足するが故に、大乘の道廣博なり、三世の諸佛歷代の祖師も皆是れ三乘の行門より法成就には到るなり、今心ある人は辨へ思ふべし、四惡趣の苦患、何れか恐れざらん、人天の福德も賴むべきにあらず、兎に角に聲聞の四諦こそ各く

が好修行なり、此世の中は皆苦なり、無常にして心ぼそき栖居なり、何事も終に空に歸す、身すら我が物にあらず、況や妻子珍寶及王位眷屬牛馬等をや、死する時は獨行、誰か我れに伴ふ、何物か身に隨ふ道具なる、今の他人は前生の親子夫妻なり、今の親子夫妻は未來の他人なり、今の牛馬魚鳥は前生の眷屬なり、今の眷屬は未來の牛馬魚鳥なり、業に引れ緣に隨て、如何なる生を受け、如何なる身とならんも計り難し、然らば今の親子夫妻の至て親きものも、別れては何國に在て何と成て有んも知れず、骨肉の親みも唯五十年の間なり、譬は一夜の宿りの友を以て深く愛し、餘の人を指て憎むが如し、一夜明けて宿を立出れは、其友は西東にちりて、我れ獨り行く、先の憎みたる人には又其夜の友となる唯賴べきは菩提なり、求むべきは佛果なり、

此身は十二因緣を以て出來たる業障の皮袋なり、先づ無明の根元を破るべし、根元破れて末葉の持つことはあらじ、財法の二施とも分に隨て心挂けよ、佛の禁戒を守て犯すこと勿れ、物に堪忍して瞋を起すべからず、朝夕佛神に祈り、誓て勵み進んて念々忘るゝこと勿れ、暇あらば坐禪せよ、法を聞て迷を覺破せよ、是菩薩の六波羅密の法なり、其根本性は諸佛と同一體なれども、佛は內に向ひ衆生は外に走るの一念の錯りより、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、の六趣、聲聞、緣覺、菩薩、の三乘各〻九界の衆生と分れたり、是を異塗の義と云ふ、其本に歸すれば、又同じく諸佛同一體なり、豈に願はざるべけんや、

第三、憤勵の義と云は、

諸佛同體の性を得んとならは、先つ無明の根元を明かにして

悟るべし、如何か明めん、自の本性を疑ふべし、如何か疑はん、眼に色を見、耳に聲を聞て、身には冷暖を覺え、意には順逆を辨へ知るべし、是を見聞覺知と云て修行の種なり、凡夫は色を見ては色に迷ひ、聲を聞ては聲に迷ひ、冷暖を覺ては冷暖に迷ひ、逆順を知ては逆順に迷ふ、是を衆生の外に向ふと云ふなり、菩薩の修行は、其の色を見る時は其見る底のものを疑ひ、其聲を聞く時は其聞く底のものを疑ひ、其冷暖を覺る時は、其覺ゆる底のものを疑ふ、其逆順を知る時は、其知る底のものを疑ふ、是を諸佛の内に向ふと云ふ、此の如く修行する時は、先づ凡夫衆生の向け處とは別なり、諸佛の向け處に均く、其の智德を成ぜれども先は菩薩子中間へ入りたりと知るべし、常に諸佛に大願を掛け、神明に祈り、祖師に誓ひ、此の如く一大事を一度は成就

して、自利利他の願海に遊ばんとなり、朝に起ては如何に閑はしくとも、先づ此念を立て先づ此見聞の工夫を試み、而して後に其業務に隨ふべし、食を喫するときは先づ此一念を先として、此の工夫を試むべし、日暮れて寢るときは、暫く臥具の中に坐して、是の一念を先として此の工夫を試み、而して後に身を放て臥すべし、是を諸佛菩薩の正直正路の修行とす、諸佛同體の本性を取失ふて、六趣四生の間に迷ひ來ることを憤りて根本性に向て工夫の心を勵むべし、是を憤勵の義と云ふ、

第四、進修の義と云は、

先の根本の工夫の心を勵まして、念々に進み、事々の上に修し習ふべし、彼の工夫の正念を提げて、行く時は行時に修し、居る時は居る時に修し、人と言ふ時は言ふ時に修し、言はずして靜

なる時は彌〻正念を勵まし、物を見る時は見る底を疑ひ、物を聞く時は聞く底を疑ひ、事繁くして物に奪はれ易き時は、奪る底の物を疑ふ、此の奪はるゝ底の物は何物ぞと疑ふ時は、奪はれても又工夫の正念を離れず、病ある時は、其苦惱を以て工夫の種とすべし、兎に角に工夫は事の多きも又増〻進むの一端なるべし、只尋常物靜なるのみならば、工夫の精彩と云ふ事はあるまじ、工夫の精彩なければ、得力と云ふこともなし、國の亂を治るには、大事に及んで戰場に向て、己に危きに臨んで恐れず、取かゝり引返へして戰ふてこそ、勝利は得るものなり、工夫の法戰も是に同じ、諸の境界に奪はれ、諸の想念に亂さるゝこそ、勝負を決するの好き時節なり、此の心を辨へ、懈怠の心なく進むべし、物靜なる時は是そ誠に城内に在て兵法軍術を修練

するなりと心得て、丹誠を抽でて修行すべし、物躁しき時は、是そ戰場に臨て勝負を決するの時なりと心得て、力をつけて工夫すへし、得力の有もあらざるも、共に諸佛菩薩正直正路の中へ行裝したる人々なり、譬へば世の强盛なる者は一日に十里十四五里を行に、弱き者は五里三里を行が如し、百里の遠き國に至らんに、强き者は八日九日には行き易し、弱き者は廿日に及ぶべし、然れども至りて後は、同じ國に居て同し人々のもとにあるが如し、力をつけて精進勇猛なると志怠て進み兼たると是に同じ、根性利根なると鈍根なるとも又同じ、病身にして成りがたきと堅固にして行ひ安きも同し、人の利鈍により根機の强弱により、省悟得道の遲速はあるべし、習修する事と道を得ることに至ては、殊なることなし、賴もしからずや、願くは賢き

も愚かなるも、貴きも賤きも、此正直修行の行裝をせよかし、此進修の中に又一義あり、工夫純熟すれば、思はず量らず得力を得べし、得力はあれども修行は怠るべからず、精彩を著れば自から得力は有ものなれば、得力に大小有て、小悟は却て大悟の妨げとなる、小悟を捨て取らざれば大悟必す得、小悟を取て捨ざれは大悟必す捨る、譬へば人の小利を貪る時は大利を得ざるが如し、小利に貪著せざれは大利必ず成る小利積り積れば終に大利に至る、小利を取りて進ざれは一生只小悟の分際にして、大自在大解脱の境界に至ること能はず、大悟に至て大自在の道を得ざれは、事と理と相應せざるが故に外道邪見の中に入る恐るべし、小悟を得ては是を種として愈〻進み、進て修行すれば、諸佛の大利悉く現前し、祖師の關鎖自然に透過し、誠に事理相應し、行解不二にして、大解脱、大自在の境界に至るなり、是を進修の要訣と云ふ、一切の法理を盡し、一切の道德を成じて、普ねく一切衆生を利益し、其機宜に應して說法敎化すれども足らざる處なく、我れと人と共に、大涅槃四德の岸に到る、此大行大願を以て生々世々自利利他を己れが所作として、盡未來際退轉なかるべし、其中間に誤りて退くことあれども、また打返し引戻し修行すべし、人の路を行くに、脚よはく路滑にして倒る、其の人倒れたりとて、起ざれば遂に其所に轉び死す、倒れては又起きあがり、又倒れては起あがり、進み進めば竟には到るなり、經に曰く、一戒を犯ずれば直に佛前に懺悔して又道に進むことは此事なり、

第五、歸本の義と云は、

前の如く工夫増進み、修行純熟すれば、終に諸佛同一體の性に歸するなり、是を成佛と云ふ、吾か宗見性成佛と云は此處なり、最初の一念、錯て内の本心に向ふべきを、外の萬境に亙て、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、の六道に浮き沈み、生を隔て世を累ねて、千生萬劫輪廻して車の輪の如し、同し苦患を受け來ること數へかたし、生々の骨を積まば毘浮羅山よりも高く、其膿血を湛へおかば大海の水よりも多からんと、如來の説き玉ふなり、今得難き人間の身を受け、殊更逢がたき佛法に逢ひ、中にも大乗不思議の正法を聞くこと、上もなき人々の僥倖なり、是れを取り誤りて捨て置かは、猶又上もなき罪なるべし、一度人身を失へば二度得がたきこと、兜率天の上より絹絲を下して、大海の底なる針の耳を貫くが如しと、又六道の輪廻は、生を隔てたる事のみにあらず、一日の中に浮き沈みすることなり、心正しく事邪ならざるは、人間なり、我に違ひて瞋恚を生ずる時は修羅なり、物思ふて心ふさがる時は畜生なり、思ひも深く悋執も強く瞋恚の燄をやますして、人を苦しめ物を害する時は地獄なり、是を人の道を失ふて、三塗の種を作ると云、又時あつて心靜り物思ふ事なく、胸すみわたりたる時は、身は人間にあれども心は天に遊ぶと云ふ、然れは凡夫の一日は六道を輪廻すること數を知らず、其の中人の心を持つこと少なり、況や天に遊ぶことをや、先は畜生の物思ひ、餓鬼の悋執、修羅の瞋恚、三塗に遊ぶこと多し動もすれば地獄道に入て、人を苦め物を害することこと多し、誠に一日の中、何の道に遊ぶこと多からんと見よ、先は悪道の心三分に二なり、人間は漸く一分を守る、地獄又其の

中に交る、左あれは只尋常の心持にて、此の悪道は免れ難し、此の一日の中に修行の心を發し、聲聞の四諦の修行、縁覺の十二因縁の觀法、菩薩の六波羅密の大道、此の心を起して彼の三途の種を斷ずべし、大乘の工夫を勵み進て勤むる時は、縱令へ得悟は未だ得ざるとも、三塗の心たえて人天の遊を越て、菩薩の階級に升る、聲聞縁覺さへ尊ぶべし、況や菩薩の道をや、菩薩の道すら尚ほ有り難し、況や一佛乘の法をや、見性悟道は諸佛頂上の禪なり、是を心にかくる者は佛種艸なり、念々の上無上の功德門を成就し、擧足下足皆般若の妙行に及ぶ、夫れ般若は讀誦の功德すら尚貴し、況や是を行ずる者をや、人を賴んで讀誦せしむるすら尚災厄を免る、況や自ら行ふ者をや、諸佛歡喜し菩薩手を引き、天神地祇は此人を擁護し、悪鬼邪神は影を見ても恐れ慄く、精靈幽魂は此の人の縁に觸れて、解脫の種を得んことを思ふ、是を最上最第一の法と云ふ、分に隨て遵行すべき而已、

入道要訣畢

明治三十四年十月七日印刷
明治三十四年十月十日發行

發編輯兼行者　神奈川縣鎌倉郡小坂村字山内四百五番地　平民　釋宗演養子　釋宗活

印刷者　日本橋區藥研堀町三十三番地　仁科衛

印刷所　日本橋區藥研堀町三十三番地　厚信舍

M-81

性海一滴

釋宗活

国立国会図書館

019510-000-3

特49-954

性海一滴

宗活／著

M34. 10

ABG-0238